



【阿川社長の足跡】

鳥取県・境港出身。地元の「米子東高等学校」を卒業後、「静岡大学」で技術者を目指して勉強を重ねる。卒業後は「全日本空輸」に就職し、整備士を経て管理職を歴任。2年半前より『多摩川エアロシステムズ』の経営を担っている。

代表取締役社長

阿川 稔

航空機整備品の整備士としてスタートし 様々な現場で経験を積む

板東 はじめに、『多摩川エアロシステムズ』さんのお仕事について。

阿川 簡単に言うと、主に航空機の電装品の修理を中心に手掛けています。電装品というのは、たとえばコックピットの計器や起動発電機およびバッテリーなど、電気系統の部品のことです。当社では、故障した小部品を新品と交換して、電装品を修理し、機能テストをした上で航空会社にお渡しする——そういう仕事をしています。

板東 かなり専門性の高そうなお仕事ですね。阿川社長はどういった経緯でこのお仕事に就かれたのですか。

阿川 私はもともと、航空機整備品の整備士として『全日本空輸』に勤めていた

んです。羽田空港で約10年現場を経験し、その後6年間、整備計画部門で羽田・成田・関空の三大空港プロジェクトという、今後10年を見越して施設設計を一から考えるという計画に関わりました。様々な人にヒアリングし、過去のデータを分析して、今後どのような整備体制にするのかを考えるんです。色々面白く、貴重な経験をさせていただきました。それから成田空港で約3年、『日本貨物航空』に出向して管理業務を担当しました。

板東 10年先を見越しての施設設計なんて、スケールの大きい話ですね。成田でお勤めになった後は？

阿川 羽田に戻り、エンジン工場の人事総務課長、教育訓練部門を経て、電装品の整備を手掛けるグループ会社の総務部長を務めました。『全日空』に戻ってからは、電装品を含めた整備品全般の管理

を担う部署の責任者を任されました。

板東 ではどうして、『多摩川エアロシステムズ』さんの社長を務めることに？

阿川 当社の沿革の話になるのですが、1952年に『三徳航空電装』として始まった当社を、2008年に『多摩川精機』が100%子会社化したんです。『多摩川精機』の航空機整備品事業は防衛関係の整備品に特化していましたので、民間の航空機整備品分野に事業を広げようと考えてのことでした。しかしあいにく、民間航空機関係のノウハウが充分ではなかったもので、詳細は分かりませんが人的支援を航空会社に依頼し、私とその役割を担うことになったのだと思います。とは言え、今まで関わりのなかった会社です。まずは出向という形で会社の状況を把握してもらい、その後本格的に当社の経営を担うことになりました。

仕事内容の見直しと、目標の共有で 持てる技術を存分に発揮できる職場づくりを

多摩川エアロシステムズ 株式会社

東京都大田区羽田空港 1丁目7番1号 空港施設第二総合ビル2階
TEL 03-5708-7821 URL : <http://www.tamagawa-as.jp>

1952年の創業以来、航空機電装品の修理・販売で実績を築いてきた『多摩川エアロシステムズ』。しかし優れた技術を持ちながらも、活気のない時期が続いていたという。会社を良い方向へと進めるため、縁あって同社の社長職を任されることとなった阿川社長は、「皆が元気に、安心して働ける会社づくり」を目指して、日々取り組みを続けている。その歩みと思いを、板東英二氏が伺った。

安かろう悪かろうではなく やり甲斐を持って価値ある仕事を

板東 最初にこちらに来た時は、どんな印象を受けましたか。

阿川 元気で優秀な従業員が多数いましたから、彼らと一緒に会社を良い方向に持っていきたく感じました。真っ先に気になったのは、仕事の単価が低かったことです。当時はまだ70人程度の小さい会社で、安くてもいいからとにかく仕事の数をこなそうというやり方でした。けれどそれでは給料も安くなり、従業員のモチベーションも上がらない。会社全体の元気が出ないように感じました。若手とベテランの間、中堅どころの従業員が少ないのも気になりましたね。

板東 長く続けられずに辞める人が多かった、と……？

阿川 そうでしょうね。いくら頑張っても給料が安くては、やり甲斐が持てませんし、将来設計も難しいですから。会社としても、低賃金のままでは良いことではありません。人材を確保できず、やり甲斐が低ければ仕事の質も下がります。それはつまり、お客様に迷惑をかけることにもつながるんです。いわゆる安かろう悪かろうでは困りますから、何度もお客様と面談し、品質の高い修理品を納品する前提で、適正単価での仕事を受注できるよう尽力しました。最初から上手くことが運んだ訳ではありませんが、徐々にお客様のニーズとこちら側の要望がマッチするようになってきています。私がこちらに来てからまだ2年半ほどなので、完全に改革できた訳ではありませんが、経営基盤と従業員のモチベーションの向上という成果は出てきています。

板東 2年半ほどで実績を出されているだけでも充分だと思いますよ。とは言え、まだまだこれからという部分もあるでしょう。今後についてはどのような展望をお持ちですか。

阿川 皆が安心して働き続けられる会社をつくる、ということが第一です。そのためには私が何をやるというのではなく、従業員皆でやっていくんだ、という意識を持ってもらうことが不可欠だと思います。ですから中期五カ年経営計画の内容は従業員と一緒に考えて考えたんですよ。目標を明確に持ち、それを全員が共有することは、モチベーションを高めることにもなるでしょう。社員一丸となって、より良い会社になるよう励んでいきたいと思っています。

板東 本日はありがとうございました。
(取材/2015年9月)

板東 英二



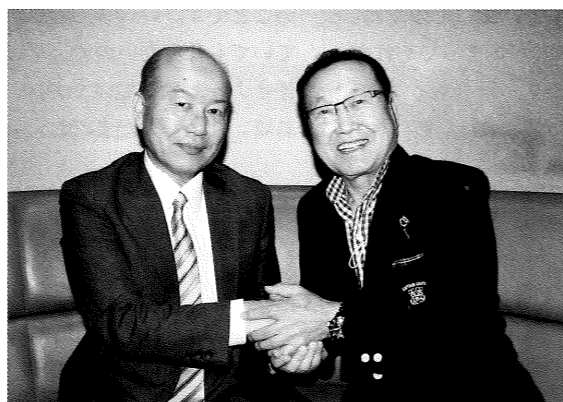
野球から学んだ、会社づくりに不可欠なもの

阿川社長は高校時代、野球部でキャプテンを務めていた。その経験から、会社づくりの上で大切なことは「キャッチボール」と「グラウンド整備」だと表現する。

「キャッチボール」は、会話のキャッチボール。そこで大事なことは、相手が取りやすいように球を投げることだ。暴投をしておいて「取れないお前が悪い」では、とても信頼関係は築けない。常に相手を思いやる心が、円滑なコミュニケーションには欠かせないという。

もう一つの「グラウンド整備」とは、整理整頓を徹底すること。作業場が散らかっていても、作業効率が下がるし、仕事の質も落ちかねない。まずは環境をきちんと整えておかないと、良い仕事はできないのだ。

社長は今、社員一丸となってより良い会社づくりに取り組んでいる。そのチームプレーもまた、会社を支える大きな力になるだろう。



「阿川社長が出向されてきた当初は、まるで町工場のような感じだったという『多摩川エアロシステムズ』さん。職場環境の見直しで、皆が生き生きと働ける、確かな基盤を持つ会社へと成長を続けておられます。今後の発展が楽しみです！」 板東英二・談